

設立30年の節目に問うた研究所の存在意義

——現在を読み解き、文化を編み直し、未来を構想する

池永寛明 Kenaga Hiroaki

〔第9代所長／社会文化研究者〕

エネルギー・文化研究所(CEL)が30周年をむかえた2016年、所長に就任した池永寛明氏。「ルネッセ(再起動)」をテーマに掲げ、研究所の新たな役割やあり方を探りながらCEL自体の再起動に取り組む一方、『CEL』誌では2年間・計6号にわたる連続特集企画「ルネッセ」をスタートさせた。池永氏が率いた変革の3年間を振り返る。

1986年4月1日に設立されたエネルギー・文化研究所(CEL)は、草創期には倉光弘己氏、山藤泰氏、古館晋氏らが基盤を築き、中興期には5名の所長が存続の意義を示されています。そしてちょうど設立30周年をむかえる2016年4月、私が所長に就任しました。

長い研究所の歴史を振り返ると、私の就任はやや異例の出来事でした。社内で研究分野を歩んできたわけでもなければ、アカデミックな世界に身を置いてきたわけでもない。むしろ、営業の現場を出発点に、国のエネルギー政策、自治体の都市計画やエネルギー・環境政策など、実務の最前線を歩いてきた「現場型」の人間で、歴代の知性派の所長たちとは毛色が異なっていました。正直なところ戸惑いがありましたが、



撮影場所／大阪くらしの今昔館

当時の社長からは「お前の好きなようにやれ」と言われたことを覚えています。

国家・企業・都市、その三層を またぐ経験が教えてくれたこと

私がCELの再起動を目指した背景のひとつに、2011年の東日本大震災があります。震災前、私は日本ガス協会〔*1〕で企画部長として国のエネルギー政策を担当していました。2000年前後には地球温暖化やCO₂削減が強く意識されはじめ、温室効果ガス排出の少ない再生可能エネルギーや原子力を活用した「電気時代」が来ると語られていました。「ガス業界は終わった」と言われるほどの危機感があるなかで、私は都市ガス事業の将来像を提示する中長期計画をつくる立場にありました。まさにその発表を控えた日の午後、震災が起こり、福島原発事故によって世界のエネルギー政策が転換を迫られたのです。私は被災地に入り、病院や工場、学校、避難所などを回りました。そこで、エネルギーが止まるという現実が、人の命や生活の根幹を奪うという事実を突きつけられました。「エネルギーは単なる産業ではなく、人の生死に直結する、人間の営みそのものだ」ということを痛感したのです。その後、北東部エネルギー営業部長〔*2〕として災害復旧対応の最前線に立ってレジリエンスを含む企業経営を学び、近畿圏部長〔*3〕と

して自治体政策やまちづくりにも向き合いました。国家レベルでの政策形成、企業レベルでの事業遂行、都市(地域)レベルでの自治体計画への参入。これらの経験を通して、私は結果的に、国家・企業・都市という三層の経営を行き来することになりました。この視座こそがCELの方向性に結びつけるべきものだと感じたのです。研究は社会の現場と接続してこそ価値を持つ。机上の議論だけでは社会は動かせない。現場で生まれた実践知と理論知を結びつけなければならぬ。CELに来た私は、研究所をいわゆる「象牙の塔」にしてはならない、社会の中に配置する必要があると強く感じました。そして、エネルギーを文化や社会と結びつけ、企業の知(ナレッジ)を社会に還元させることが使命だと考えるようになったのです。

所長就任時に見えた課題——豊かな蓄積、しかし社会課題との接続が弱い

CELに着任してまず感じたのは、「ここには宝の山がある」ということでした。大阪ガスが実践・提案する「NEXT21」での居住実験や生活者調査、文化研究、地域研究など、どれも企業所属の研究所としては比類のない知の蓄積がありました。私自身、企業や行政での経験から、こうした実践的な知が、いかに貴重な理解していました。また、『CEL』誌の存

在も大きかったです。社外のオピニオンリーダーと言われるような人たちが、たとえば作家の堺屋太一氏〔*4〕が手元に残していた数少ない雑誌の一つに『CEL』誌の第2号と3号があったことは、研究所としての社会的影響力を示す象徴的な例です。私の所長時代にスーパードバイザーとしても参画いただいた知の巨人と言われる松岡正剛氏〔*5〕など数多くの識者たちからも、『CEL』誌は高い評価を得ていました。

しかし同時に、「研究所の価値が社会にも社内にも十分に伝わっていない」という強い危機感も抱きました。実際に研究員の専門性は非常に高く、学識者からの評価も厚い。なぜ社内外に十分伝わっていないのか？ それは研究員の研究と活動が個々に行われ、その研究内容と社会課題の構造との接続が弱いからではないのか。これは研究者個々の問題ではなく、組織としての方向性が曖昧なことが原因ではないのかと考えました。結果、研究の意義を説明することが難しくなり、研究所全体としての存在理由が見えにくくなっていったのではないかと。

私はまず、研究所としての「物語」を取り戻すことが必要だと考えました。どこを目指し、なぜ存在するのか。その根幹を言語化する作業を避けては通れない。過去の延長線で研究を続けるのではなく、未来との接続点をつくり直さなければ、研究所の存在意義は失われる。その確信が、私に覚悟を与えました。

再起動を目指して——改革の象徴となった「ルネッセ」の思想的枠組み

改革の起点となったのが、10年以上先となる2030年の社会風景を見据えた中期計画の策定です。私は、研究所は未来を見通す力を持たなければならないと考えていました。未来を構想する力がなければ、研究は過去の知識の蓄積に後退してしまふ。しかし同時に、未来だけを語っても現実を動かす力にはならない。現在という現場の複雑さを丁寧に読み解くことが必要であり、そのためには文化の視座が欠かせません。文化(culture)というと芸術や教養を指すように思われますが、語源を同じくするカルチベート(cultivate)という言葉が示すように、耕す・掘り起こすことが大切です。そこで私は、研究の三本柱として「未来を観る力(構想・予見)」「現在を観る力(現場・実践知)」「文化を編む力(統合・編集)」を掲げました。

未来の兆しを見つめる力、現場の声に耳を傾ける力、専門性の異なる知を編集して社会に還元させる力——これらが企業シンクタンクの存在意義です。「NEXT21」が象徴的であるのは、そこに「現場の息遣い」があるからです。そこで暮らす人々の声や体験を研究に結びつけることがCELの強みです。しかし当時、それは十分に活かされていないようでした。研究者の自由研究ではなく、社会の課題から出発する

研究へと転換させる必要がありました。私は繰り返し伝えました。「まず社会があり、その課題からテーマが生まれる。研究のための研究では意味がない」と——ただし、これは、研究員の興味を否定するものではありません。むしろ、その専門性を社会の課題にどう生かすかという、より高い視点への転換でした。

その象徴として私が立ち上げたのが「ルネッセ(Renesse)」です。ルネッセとは、ラテン語の「再び(ren)」と「実在する(esse)」を組み合わせた造語で、暮らし・文化・都市の「再編集」を意味します。未来・現在・過去を横断しながら、研究成果を社会と企業につなぎ直すための思想的枠組みです。研究成果は積み上げるだけでは意味を持たない。社会に届けられ、理解され、使われて初めて価値が生まれる。研究を「再編集」し、社会に開く。この思想がCEL再起動の要となりました。

同時に、発信力の強化にも取り組みました。社内の評価は社外の評価によって変わります。私はより多くの人にCELの存在を知ってもらふ必要性を感じ、2017年から、『日経COMEMO』*6での連載を通じて社会への発信を続けました。日本経済新聞社大阪本社から「内容は何でもいい。池永が大阪から発信することに意味がある」と言われ、逆に大阪からの知の発信が失われつつあるという現実を突きつけられました。大阪では、かつて商人文化の中から未来を開く知が生まれていました。それをもう一度取

論し、実際に1000のキーワードを提出しました。それを見た松岡氏に「本当に出したのか」と驚かれたことを覚えています。そのプロセスの中で、私は改めて「文化とはシステムである」と強く感じました。伝統芸能や形を守ることだけが文化ではなく、文化とは未来へ向けた方法論だということです。そして文化は、企業文化も含め、人間の生きる技術である。その考えを深めたのが、松岡氏との対話でした。対話の終盤になるにつれて、松岡氏が聞き手に回る場面が増えたのも印象的で、それはCELそのものへの評価だと受け止めています。

再起動期を終えて——研究所とは何のために存在するのか

私は研究を単なる「知識の保管」だとは思っていません。過去を保存する行為ではなく、未来を生み出す行為です。だからこそ、CEL

の使命は過去ではなく未来にある。未来を夢のように語るDreamerではなく、徹底して現代を見据え、そこに埋め込まれた未来の種を掘り起こす存在であってほしい。現在の中には過去の本質が埋め込まれ、未来の種が潜んでいます。それを「見える化」し、「見せる化」し、「かたち化」する。その三つの工程を私は研究の基本方程式だと考えています。特に今後の生成AIの時代にはこの工程が大事になるはず。生成AIは、いわば平均解の領域を高速で模倣し、大量に生み出す存在です。レポートも企画書も、就職活動のエントリーシートさえも、同じようなものが大量に生成されます。では生成AIが模倣できない知とは何か。それは実践知と理論知が融合した知であり、人間の経験から生まれる思考の飛躍です。だからこそ、CELの研究員には、経験を経験のまま置かず、思考に変換し、理論化してほしい。それが未来を切り開く唯一の方法ではないでしょうか。

振り返れば、CELの再起動に取り組んだ数年間は、研究所の存在意義を問い直す時間であり、同時に私自身が「研究とは何か」を深く考える時間でもありました。

この経験を通じて、私は確信を持ちました。研究所は、人の暮らしの変化を丁寧に観察し、文化を編み直し、未来を構想する場である。そしてそれは、単なる情報の蓄積ではなく、人間の営みそのものを理解し、未来への道筋を描くための知的営みである、と。研究所が掲げ続け

り戻す必要がありました。

また「大阪くらしの今昔館」の谷直樹館長(当時)との出会いは、文化とは過去の展示ではなく、未来を生み出す装置であるという強烈な気づきを与えてくれました*7。文化とは物の見方、感じ方、考え方、行動の方法であり、社会を動かすOS(オペレーティングシステム)だと理解したのです。

もう一つ、印象深い取り組みとして、松岡正剛氏との「ルネッセ」での対談があります(『CEL』誌2017年7月・116号〜2018年3月・118号に掲載)。これは私にとってもCELにとっても非常に大きな意味を持ちました。第1回の打ち合わせは大阪の法善寺横丁で行われましたが、事前にいただいた宿題は「大阪関西から見た日本史のキーワードを古代から現代まで1000単語挙げること」。無茶な依頼にも思いましたが、CELの研究員全員で議

た「エネルギー・文化」はまさにその精神の表れです。このCELの精神が、歴代の所長たちにも受け継がれ、それぞれの形となり蓄積されているはず。これらの知を活かしつつ、現在の富尾博之所長とCELの研究員たちが持つ情熱と専門性で、これからの社会に新しい視点を提供し続けてくれることを願ってやみません。

注

- *1 全国193の都市ガス事業者が加盟する業界団体(2025年4月時点)。
- *2 大阪ガスエネルギー事業部、大阪北東部・奈良エリアの業務・産業用ガスを担当する営業部長。
- *3 近畿圏における地域活性化や価値創造活動の推進を担当。
- *4 「1935〜2019」作家・経済評論家。大阪府生まれ。通商産業省(現経済産業省)の官僚として1970年の大阪万博開催に尽力。小説『油断!』『団塊の世代』などを発表し、退官後も多方面で活躍した。
- *5 「1944〜2024」編集者・著述家。京都市生まれ。「編集工学」を提唱し、情報、宗教、美術など多様な分野で日本文化を論じた。『知の編集工学』『日本という方法』『松岡正剛千夜千冊』など著書多数。
- *6 日本経済新聞社が運営するオビニオン共有サービス。様々な分野の「キーオビニオンリーダー」たちが、社会に思うこと、専門領域の知見などを投稿する。現在は「Fano」上にプラットフォームを移す。
- *7 文化講座「上方生活文化堂」(産経新聞社主催、CEL・大阪くらしの今昔館企画)の開講は、谷氏とともに実施したルネッセの実践例のひとつ。



池永寛明
(いけなが ひろあき)

1959年、大阪府生まれ。1982年4月、大阪ガス㈱に入社。人事・勤労、エネルギー企画、日本ガス協会企画部長、北東部エネルギー営業部長、Marketing部会長、堺屋太一研究室主任研究員、関西国際大学客員教授、未来展望研究所長など。社会文化研究家・日本経済新聞COMEMOキーオビニオンリーダーとして、都市・社会・産業の現状と課題を過去と現在と未来をつないで読み解き、コロナ禍後社会のあり方・未来展望などを社会に発信中。



2018年9月8日NEXT21ホールにて、江戸後期の大阪商人で絵師・戯作者でもあった晁鐘成が、知の交換と共有の場として催した「汁講」を再現。大阪の再起動を議論した。